

【結語】 eポートフォリオを用いた日誌による振り返りと教員からのフィードバックによる指導を全科共通で開始して1年が経過した。診療科によって使用方法および内容は異なるが、指導があれば学生は積極的に使用している様子が分かった。また、日誌の中には実習内容および学生の気持ちが記されることが多く、ひとりひとりにそった指導への可能性が見えてきた。

P3-37.

大学院生における研究環境の現状

(医師・学生・研究者支援センター)

○須藤カツ子、大久保ゆかり、持田 澄子

天野 栄子、荻野 令子

(病態生理学)

林 由起子

(公衆衛生学)

小田切優子

(医学総合研究所)

中島 利博、荒谷 聡子

(産科・婦人科)

西 洋孝

(腎臓内科)

長井 美穂

(呼吸器外科・甲状腺外科)

矢野由希子

(分子病理学)

真村 瑞子

(人体病理学)

原 由紀子

(救命救急センター)

河井健太郎

医師・学生・研究者支援センターでは本学の大学院生の現状を把握する目的で、大学院生を対象としたアンケート調査を平成29年に実施した。アンケート対象者数226人、回収率30.5%（有効回答数66、無効回答数3）で必ずしも大学院生の現状を確実に反映しているとは言いがたいが、何らかの傾向が掴めるものと考え解析してみた。調査の結果、博士課程の75%が社会人大学院に所属し、医師・歯科医師が社会人大学院生の78%を占めた（他は薬剤師、記載無し、資格無しが22%）。そこで今回は医

師で社会人大学院博士課程院生の研究活動について報告する。

社会人大学院生の医師は男性66%、女性34%で構成され、男性の57%が大学病院に、女性の55%が大学に勤務し、男性の半数は助教、女性の半数は後期臨床研修医であった。これはアンケート回答者の男性の33%が4年生に対し、女性の4年生は18%である事に起因していると思われる。

研究のための指導について男性医師、女性医師ともに84%以上で十分に指導されている事がうかがえた。研究時間の有無をたずねたところ十分ある・少しあると回答した男性は67%、女性は54%であった。あると回答した院生の研究時間は共に1~3時間で、1週間の研究日数は1~3日であった。研究時間がほとんど無い・全くないと回答した院生が必要とする研究時間は男性で1~6時間、女性で2~5時間、日数は共に1~3日であった。研究テーマについての自由度は男女とも80%以上で自由度ありと回答している。平成28年度の業績は男性の71%、女性の45%が日本語で、男性の28%、女性の9%は英語で学会発表しており、男性の14%、女性の27%が日本語の、男性の33%が英語の筆頭著者論文を1編以上発表していた。

学位取得後についての質問で取得後も『臨床と研究を継続したい』と回答したのは男性59%に対し、女性は27%にとどまっていた。女性の37%が『学位取得後は臨床に専念したい』との回答であった。

P3-38.

e 自主自学を用いた客観的自己評価プログラムの実践

(産科婦人科学)

○野平 知良

(医学教育学)

油川ひとみ

【目的】 自分を客観的に評価することは医師の自律的学習能力獲得に必須である。我々は臨床実習における症例プレゼンテーションの際に moodle の「ワークショップ」上で自己評価を含む学生間相互評価を実施してきた。今回我々は昨年1年間の「自己評価プログラム」の結果を用いて、学生の自己評価の特性とプログラムによる意識変化を検討した。